



# 新しい運動の萌芽と 時代の「熱」が感じられる1冊

評者 <sup>ささきりょう</sup> 佐々木 亮  
(弁護士/旬報法律事務所)

日本の若者は、現状が不満でも声をあげない。現代の若者はおとなしい。そのように指摘されることがある。自分もかつて若者だったが、その時代に声をあげていただろうか。テレビで60年代、70年代の学生運動が「昔のこと」として放送されることがある。それは、当時の若者たちが起こした騒乱の一部を切り取って流される。75年生まれの私は、あの時代を生きていない。それゆえ、当時の映像は単なる歴史の1ページであり、その時代の「熱」を感じることはできない。

エキタスという団体がある。最低賃金を時給1500円とするために運動している団体である。最低賃金を1500円なんて「高い！」と思う人もいるかもしれない。東京都でさえ最低賃金は1000円に満たない時代に、1500円を目指している。このエキタスは若者の団体である。いわく「生活苦しいヤツ声あげろ」。なかなかストレートでかっこいい。そうか、若者でも声をあげるヤツがいるんじゃないか。

## 若者たちの「生」の声

本書は、一風変わった本である。最初にグラビアがある。エキタスのデモや集会の様子が写真で紹介される。若者らしい派手やかなデモである。

グラビアを抜けると、エキタスメンバーが集会やデモで行ったスピーチが続く。「なんだ、スピーチか…」と思う人は、一度、<sup>だま</sup>騙されたと思って読んでみるといいだろう。若者の生の「声」である。声をあげた若者が何を叫ぶのか。一人ひとり個性があるが、私が<sup>はくび</sup>白眉だと思うのは藤川里恵さんのスピーチである。彼女の至近距離から始まるそのスピーチは、社会への批判、大人世代や同世代への批判も含みつつも、上から目線で語られることは一切ない。しかし圧倒的な迫力なのである。もちろん、他の人のスピーチも、今の若者の実態と、この社会をどうにかしたいという思いが詰まっており、やはり迫力

『エキタス 生活苦しいヤツ声あげろ』  
エキタス十今野晴貴、雨宮処凛(著)  
かもがわ出版/2017年8月発売/1500円  
(税別)



がある。やはり、苦しいヤツは声をあげるべきなのだ。

ここまででも、1冊の本として十分であろうが、第2章ではPOSSEの<sup>こんのはるき</sup>今野晴貴さんが登場する。『ブラック企業～日本を食いつぶす妖怪』(文春新書)の著者である今野さんが貧困・格差の実態と構造について豊富なデータとグラフを用いて解説する。これがまた、なかなかすごい。国民の所得の低下、中間層の崩壊、そして貧困問題へとつながっていく。労働組合の組織率の低下や非正規労働者の増加、ワーキングプアの出現、それが若者世代に多いことを、データをもって論証している。この章自体が、もし1冊の本だとしても十分に耐えうる充実感である。

最終章は、<sup>あまみやかりん</sup>雨宮処凛さんが進行役となり、労働相談などを行うNPO法人のPOSSEとエキタスメンバーとの座談会である。新しい貧困問題と新しい反貧困運動を担う20代の若者6人+今野さんの座談会は読みごたえがある。

本書の味わいどころは、新しい運動の<sup>ほうが</sup>萌芽を見ることの「わくわく感」と、時代の「熱」を共有できる喜びにある。是非、一読されたい。